



1 ロフトから路地の向かいを見る。連なる瓦屋根。手前右の瓦屋根が幸家さんの家。

2 幅4.5mの前面道路は向かいの家と半分ずつの私道。植木やバケツ、ベンチが路地の使われ方を物語る。

3 家の前で、幸家さん一家。

4 台所。床が張られていたが
本来の土間に戻して玄昌石を敷

き、路地とのつながりを図る。既存のプリント合板の壁にはまず油性ペンキを塗って拭き取り、その上に水性ペンキを塗って仕上げた。左の棚は使い古した合板(24mm厚)で、右の棚は建築現場でたたいたパインの端材でつくった。家の傾きは台所の柱を補強して直した。



長屋を
自力改修して、
半戸外を愉しむ。

大陽市阿倍野区

建築八十年余の木造家屋だからこそで、改修がある。建築家の幸家大郎さんは自分で時間をかけて改修することにした。コストを抑えながらも工夫のある改修術。

郎

特集
それぞれの、
改修物語。⑤



5 既存の床下換気口が玄関の靴脱ぎ石の左右にある。網戸一体の玄関扉（手前左）としたので、ウラからオモテへの床下通気が復活した。

6 通風を考慮して、玄関は半戸外という考え方でデザインした玄関扉。網入りで通風は充分。冬は半透明シートを張って風除け。奥右は台所へ。

7 既存のガラス戸で玄関と室内を区切る。路地を行く人影による光の動きが擦りガラス越しに感じられる。藁床の畳は表替えした。

8 手前が居間。床は傷んだ畳をO.S.ボードに替えて白く塗装した。押入れは有孔ボードに襖の裏打ち紙を張った引き戸に替えた。敷居の溝1本の上をスライドする。

9 台所から裏庭方向を見る。奥にロフトへ上の梯子が。

10 台所と3畳間はロールスクリーンで仕切る。境に設けたテーブルで朝食をとることも。台所と居間の段差は43cmあるので踏み台を用意。

11 縦格子から中をのぞくと、台所。部屋の奥に裏庭の緑が見える。通り庭的抜けを感じさせるシーン。



10

9



5



が、風通しをよくするために網戸兼用の回転式扉に付け替えた。家主には事情を話し、元の玄関戸は取り置いてある。幸家さんはアトリエとして使

ううちに、静かで前面道路も子供の遊び場として安全なことを住まいにしようと思い立つ。そして二年前、全面的な改修にとりかかった。床が張られていた台所は本来の土間に戻した。つまり路地に面した玄関と土間は半戸外的なスペースだ。

「土間は寒いだろうなど覚悟していましたが、案外暖かいんです。買物して帰ってきても玄関から荷物をすぐどんと置けて便利だし」と妻の恭子さん。土足

のまま出入りできる台所というはずだったが、室内では履物を脱ぐという習慣が身についているせいか、現在のところは内履きを使っているという。

玄関に面した三畳間のガラス戸を開けたまま居間に座つてると、通り抜けていく風が心地いい。土と草の匂い、庭の木（ウラ）へ、視線も風も抜けていく。居間の奥、すでに増築してあつた部屋はユーティリティにした。そこは隣家に正対するので、上部にあつた窓はふさいで壁として、小さな庭だけ眺められる地窓を庭に張り出すようなかたちで設けた。

オーレックは安全で使いやすい製品づくりをめざしています

www.orec-jp.com/raku/



移動が簡単な
ミニ耕うん機
スーパーフレッシュピコ
SF40W

詳しくは
ホームページを
ご覧下さい

OREC

株式会社オーレック
〒834-0195 福岡県八女郡広川町日吉548-22
TEL:0943-32-5002(代) FAX:0943-32-6551

ゆく
年

月を眺め、瓦を庭に見立てる。

ユーティリティの上階、もとは物干場だったところに、寝室として使うロフトを増築した。そこはユーティリティと吹き抜けでつながっているが、この家では唯一プライベートスペースといえる場だ。路地からはもとも奥まったところにあり、しかも路地側からロフトはまったく見えない。

「ここからはちょうど夏の満月が眺められます。子供がお月さま！って最初に見つけますよ。それから瓦の庭に見立てているんです。だからできるだけ開口を大きくとるために、窓枠が外側に隠れる外付けの木製建具に

しまった」ロフト部分の改修は既存の床組を足場として残し、解体と屋根の施工を並行して進めた。「友人の手を借りて集中的に作業を進めるとき以外は、一人で時間があいたときにこつこつやつたので、完成までに一年かかっちゃった」「いつになつたらできるのかしらって気長に待つてたわ」と、幸家さん夫妻は笑いながらふりかえる。

前路地と一体感のある玄関と台所、空と月と瓦の眺めを愉しむロフト。外を取り込む工夫が、この長屋の居心地の決め手となっているようだ。



12



13



14

12 既存増築部の上は物干場だったが、屋根を上げてロフトを設けた。床は幅広の杉板(38mm厚)。裏庭に面した北側は隣家と正対するので壁を立ち上げている。

13 裏庭から北側外観を見る。左壁を見ると、窓を閉じて足下だけが見える地窓にしたことがわかる。キンモクセイ、シュロ、手水鉢などは以前のまま。白砂利を撒いた。



15





掲載雑誌： 住む。2006 夏号／No.18



阪南町界隈のさまざまな長屋。

大阪長屋が 住み続けられる理由

阿倍野区阪南町周辺にはおよそ築80年という長屋が多く残っている。増改築されながらも、いまだに壊されずに住み続けられているのはなぜだろうか。

大阪市立大学大学院工学研究科の酒井雅男さんは、任意に選んだ長屋11軒の住人に聞き取り調査をして、次のような理由を挙げている。

- 1.余地空間があり、増改築しやすい。
前庭・後庭、ゆとりあるトイレ、玄関まわりのゆとりなど機能を限定しない余地空間があり、増改築がしやすい。
- 2.固定及び変容が明確な空間による平面構成。
中央に融通性のある続き間を配し、両端に改変要求の著しい水まわりを前庭後庭という余地空間とセットで配置した平面構成が、水まわりの増改築を容易にしている。

- 3.通り抜けを前提にした住まい方。
「通る・居る・しまう」ところといった居室を帶状に使い分ける住まい方が見られる。そうした居室の通り抜けを許容するライフスタイルによって、オモテ・ウラでの台所の拡張や風呂・脱衣場・居室などを奥行き方向に増築しやすくしている。
- 4.外部空間を含む自己領域の明確性。
長屋はオモテ・ウラともに門や塀によって外部空間(ニワ)を含む各住戸の領域が明確に分けられている。そのため貸家から持ち家への譲り受け、住み手の自由意志による個別の保全・建て替えの選択を可能にしている。

この考察は、住み続けられる家を考えるうえで、参考になるのではないだろうか。



ほどのよいご近所付き合い。

幸家さんの家の前の道は幅四・五メートル。その半分が向かいの家と分け合う私道である。軽自動車一台がやっと入るくらいの広さ、子どもの遊び場としても安心できる。三年ほど前に舗装されたが、舗装する前にすでにレンガで囲つて植栽をしていたところは、住人の希望にそつて舗装せず土のまま残されて

いる。私道にはそれぞれの家が好きな鉢植えを並べている。ベンチを置いている家もある。「ほとんどの住人は緑があることを喜んでいて、隣りの植栽について水遣りしたり何となくお互いさまって感じがありますね。うちもときどきご近所さんから戴きものをするので、旅行に行つたときなんかお土産を届けたりしてます」

外観を撮影していると、ご近所さん二人から「何ですか」と声がかかった。幸家さんが説明すると、ああそうなのとすぐわかってくれる。近くの商店街を恭子さんと歩いていると、「ここにちは」とすれちがう人が声がかかった。幸家さんが説明すると、ああそうなのとすぐわかる。深入りはしないけど、顔見知り。そんな関係がいいと幸家さんはいう。



「まずは商店街で古くからやつてゐる不動産屋を見つけ、何のことなど話すうち、「そうか。にいちゃん、大工なんやまあ多少の誤解はあつたにしろ、話が通ればあとは早い、退去するときは改造した分の権利は放棄するとい

「まずは商店街で古くからやつてゐる不動産屋を見つけ、通いつめました。そこで僕の仕事のことなど話すうち、「そうか。にいちゃん、大工なんやー」って(笑)」「まあ多少の誤解はあつたにしろ、話が通ればあとは早い。理解ある家主さんを紹介してもらい、退去するときは改造した分の権利は放棄するという約束で、長く物置として貸し

「道路の幅は狭く、地権者が入り組んでいるから売るに売れず、貸家としても周囲の新しいマンションに借り手は流れてしまう。そのためボロボロのまま放置されたり、物置状態になつた長屋が多くあることが分かつてきなんです」

なので家賃も、それなりに安い。費用は自分持ちで改装しながら使つことはできないか。

「すぐそばに鉄橋があつて電車の音はすごいし、川の近くというのも最初は面白いかと思つたんですが、良かったのは天神祭りの船が見えるときくらい（笑）。店舗用だから改造は自由でそれはそれで楽しんだものの、3年もするとさすがに飽きてきて」

A black and white photograph showing a view from a tiled roof looking down at a residential area with traditional Japanese houses and rooftops.

開発の魔の手を逃れ、大正の面影を今に残す長屋街

持ちも少しはかりほくれる気がするのだ。
今回訪問する先がその上町線沿線にあると聞いて、いつぶんに好感を持つてしまうとい
うのもマスコミ人としてどうよと思うのだけど。駅前で待ち合わせをして、「この辺りは
空襲でも焼けなかつたそうです」という古い看板建築の前を通り、軒をこするようにな狭い
路地を曲がつて曲がつて、丹精された鉢植えが並ぶこの一角に着いたときには、好感度は
さらに倍。うわあ、いいですねえと阿呆みたいな感想しかでてこない。

カルの、小さな路面電車である。住吉大社へお参りをしたら南海本線でびゅっと梅田まで戻ってしまう、ほんの小さな寄り道。しかしながら暮れせるところ(近ごろ大阪あたりじゃ、新幹線のぞみで日帰り仕事ばっかりなもんね。ふう)、商店街の間を自転車とどっこいどっこいな速さで進むチンチン電車の香氣なりズムに揺られていると、張りつめていた気持ちも少しばかりほぐれる気がするのだ。

今回訪問する先がその上町線沿線にあると聞いて、いつぶんに好感を持つてしまうといふのもマスコミ人としてどうよと思うのだけど。駅前で待ち合わせをして、「この辺りは空襲でも焼けなかつたそうです」という古い看板建築の前を通り、軒をこするよう狹い路地を曲がつて曲がつて、丹精された鉢植えが並ぶこの一角に着いたときには、好感度はさらに倍。うわあ、いいですねえと阿呆みたいな感想しかでてこない。

開発の魔の手を逃れ、大正の面影を今に残す長屋街

もしかして芸名(?)ですかと尋ねたくなるくらい建築家としてどんびしやな名字をお

か 壱の波と、路地の風

Profile
幸家大郎／1967年広島県生まれ。
九州芸術工科大学芸術工学部環境設計学科卒。
米国でのクラシック・アカデミー・
オプ・アーツ建築修習修了。
91～93年、吉田保夫建築研究所に所属。
95年よりクリンブルック・
アーキテクチャ・オフィスを経て、
帰国後、97年「幸家大郎建築研究所」開設。
旧墨を現行の幕なしに生かす活動を続ける
「社団法人A S P A」とも関わり、
恭子さんは事務所のスタッフとしても働く。
将来は阿倍野でカフェを開きたいとのこと。
改子ちゃん2歳。

Photographs by Taro Terasawa Text by Mary Yamada
写真 寺澤太郎 文 山田真理

自分の屋根にのぼる。事はいまどき、それができる人はかなり稀だ。

大阪・阿倍野のこの家では、父さんが造った寝室から、昔ながらの藁の波が見渡せる。

夏は涼しく、冬暖かい。快適長屋
近くにもう一軒、小さな木造住宅を借りて住居とし、こちらは事務所として使いながら改修計画はスタート。「人が住まなくなつて長い家でしたから、湿気がこもつてカビだらけ。畳も壁ももちろんボロボロでした」古い畳や床板をはがし、断熱材を入れて新しい畳や床板を張つて。壁のプリント合板はそのまま上から塗装をした。玄関の戸は風通しをよくするため、網戸を入れた回転式扉を作つて付け替えた。そうした作業は、仕事の合間に幸家さんが一人でコツコツ進めて行つた。

築80年以上。原型は、路地に面して土間の玄関と台所、続いて二畳・三畳が横に並び、六畳と収納。そして裏庭があり、背割りという細い通路をはさんで同じような長屋が軒を連ねる。

「たぶん戦前の大坂では、庶民クラス向けの一般的な長屋の造りだったと思います」

裏庭は比較的スペースが広いため、ここの物件がそうだったように物置などを増設しているケースが



掲載雑誌： LIVING DESIGN 2007冬 vol.50

内と外の境があいまいだからこそ得られる安心やくつろぎ。「それでいて寝室は、路地から最も奥のロフトに確保できた。平屋の木造長屋は、プライベート空間と外部との関係がベタベタに近いところが僕自身も気になっていたんですが、この家ではその辺をうまく解消できた」戸外と屋内をきっぱり分けるのではなく、ゆるやかにつながりを持たせながら、部屋それぞれの役割に合った距離感を考える。長屋の改修で得た経験は、たとえば神戸の個人住宅（いわゆる旗竿型の土地に裏庭を生かしたカブエ兼住まいを建築）や、幸家さんの実家（瀬戸内海の島で建築資材会社を経営。資材置き場と自宅との距離感が課題だった）の設計などにファイードバックされているという。

島で一軒の建築資材屋のボン（家業は弟さんが継いでいる）に生まれたこと。それは、建築家としての自分に少なからず影響を与えていたのではと幸家さんはいう。「日本中そうだったでしょうが、新しい建材が本州から入ってくると『あれ売れこれ売れ』と。それが地域の伝統色を失わせる過程を横目で見てきたわけです。工法も規格化され、昔ながらの職人の技も廃れていく。中学くらいで知恵もついてくると『何か間違つて

る！』と憤つたりするんだけど、その金で学校行かせてもらつて自分のいるわけで……」今回の建て替えでは島に残っていた左官屋さんに土壁を塗つてもらい、長屋で実践した二重屋根など自然の力を利用した住まいを心がけたという。「今の長屋はローアという切り口で取り上げられることが多いのですが、僕は『手でモノを作るのが好き』という単純な理由で続けてきたことの延長にこの家もあるだけ——どちらかといえば立場上、ローアの影の部分も語らなきやいけないと思つてゐるんです」

安くして便利で素人でも簡単に扱える材料がホームセンターに並ぶ。それは決して悪いことではないけれど、「ビス一本にしても、昔から商売している金物屋で生産、流通ルートのはつきりした物を買うか、ホームセンターで大量生産の物を買うかで品質ははつきり違います。大量生産品は、縮めてる途中でぼつかれ、昔ながらの職人の技も廃れていく。中学くらいで知恵もついてくると『何か間違つて

り折れることもある。塗料にしても伸びが悪い」しかし坪数いくらで材料費を制限され、「安くもできるんでしょ」とユーザーから追求されてしまう状況では、プロの職人もそうした素人用の素材を使わざるを得ない。そうやって、ちょっとずつ誰かが誰かの首を絞めてるような連鎖がある。「どこをどうしたら解決するという、単純なモノダイやないんですけどね」自らとんとんかんと手を動かし、ときには屋根にのぼつていぶし銀に光る葉の波を眺めつつ、住まいのこと家族のこと、この国の環境にいたるまで、いろんなことを考えてきたという幸家さん。「自分にはまだ知らないことがいっぱいあることも、長屋という素材を通して分かつてきました」

工事は、いまだ続行中。子育てが進むと同時に、家族のスペースを考え直す必要も出てくるだろう。これから先の変化もまた、楽しみな住まいがここにある。



左・ロフトへ上るはしご。右・幸家さん背後は収納。表見屋さんへ持ち込んで接の下紙を貼つてもうった穴あきボードを引き戸に。